

開催地名	神奈川県綾瀬市
開催日時	令和6年1月20日（土） 13：30 ～ 15：00
開催場所	綾瀬市オーエンス文化会館 大ホール
語り部	山田 修生 （宮城県仙台市）
参加者	綾瀬市民 350 名
開催経緯	関東大震災から 100 年目の節目を迎える中、災害への備えに対する気運は高まりつつあるものの、地震等の大規模災害の経験者が少なく、具体的な「自助・共助」の活性化には至っておらず、課題となっている。
内容	① 自然災害のこわさ 東日本大震災はどれくらい凄まじかったのか。（2011 年 3 月 11 日マグニチュード7）午後一時過ぎ、いつもより早く仕事が終わる自宅にいた 14:26、すごい揺れに襲われた。縦揺れ、横揺れ、斜め揺れ。両手両足で何かにしっかりつかまっていなくて吹っ飛んでしまいそうなほどの大きな揺れ。そして得体の知れない物凄い音。地中の奥でゴゴォーッと響く音。身動きがとれないし、今何をしたら良いのかわからない状態であった。テレビや冷蔵庫は倒れ、排水管や水道管は破裂し水が噴出している。電柱は倒れたり曲がったり火花を散らしていた。マンションなどは屋上タンクから滝のように水が噴き出していた。 ② 自助の視点での教訓 まずは自分の身を守ること。そして身近な家族を守ることが重要である。そのために災害に備えて自宅で一部屋を家族の避難場所とし、その部屋にはなるべく物を置かず、置いたとしても腰より低い家具のみ、災害時に咄嗟に家族が集まれる場所（自宅避難）を設けることをおすすめしたい。 また、東日本大震災のように日中の災害時には、男性は働いている割合が多く、何日も帰宅困難な状態になる可能性がある。そのため、女性中心の避難訓練の実施も大切と考える。それに伴い、防災メンバーや自主防災会長などに女性を登用することもこれからは必要ではないかと考える。 そして、災害時は何を持って逃げれば良いか。ラジオ・懐中電灯・携帯電話・バッテリー・薬など。通帳などは持っていなくてもよい。 懐中電灯は天井に向けると部屋全体を明るくすることができる。また水の入った 2 リットルのペットボトルに懐中電灯を当てると、部屋全体を明るくすることもできる。

③ 共助の視点での教訓

町内会、自主防災組織などの団体の避難訓練を長い間行ってきたが、家族・近隣住民など小単位で避難せざるを得ないのが実情であった。

マンション住民などの誘導は、とにかく声の大きな人がまず大きな声で安心させることが大切である。泣き叫ぶ女性たちが多い中、「私の言う通りに動いてね。大丈夫だから。」と気持ちを落ち着かせるように声かけし、誘導をした。

また、要援護者・要支援者であっても、大前提は自助と考える。人を助ける人達もまた同じように被害を受けている。

さらに、災害時協力会社や団体との日頃からの連携も大事である。災害が起こったあとすぐには物資が届かないので、食糧の販売をしている会社は地域のひとに食糧を提供するなど、地域で共に助け合うことが大切だからである。

災害とは、どんな準備をしてもし過ぎということはないし、日頃の訓練は一旦身につけたものは裏切ることはないということ覚えてほしい。



開催地より

東日本大震災を経験された語り部から、災害発生時の避難の状況、地域での共助の重要性、普段からの災害への備えや心構えについてわかりやすくお話いただいた。

本日の講習を受けて、当市では自助・共助の更なる啓発を進めていくとともに、市民の防災・減災意識の向上を図っていききたいと思う。